みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

縦横無尽
タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(14)：タテ糸の張力と織機の型式4：腰機2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5225

無尽縦横 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク 14

吉本 忍

タテ糸の張力と織機の型式4 腰機2

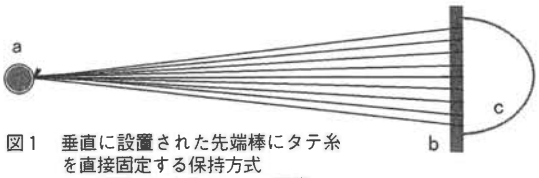


図1　垂直に設置された先端棒にタテ糸を直接固定する保持方式
a-先端棒、b-布巻き棒、c-腰当

写真1　彝族の腰機による機織り
（中国、雲南省：1996年）

腰と棒を使う腰機

腰を使ってタテ糸に張力を付与する型式の織機のうちには、先月号で紹介した腰とともに足を使う腰機のほかに、腰とともに棒を使う腰機がある。今月号では、この腰とともに棒を使ってタテ糸に張力を付与する型式の腰機について紹介する。

腰と棒を使ってタテ糸に張力を付与するということは、タテ糸の一方が棒によって固定されており、他方を織り手の腰でひっぱることによって、タテ糸の張力が生みだされるということである。したがって、このような腰機での機織り作業では、タテ糸の張力は必要に応じて織り手の腰の動きにともなって加減されることとなる。なお、タテ糸の一方が棒によって固定されているばあいの棒は、タテ糸の先端部を保持するためのタテ糸保持具としての機能をそなえている。そうしたタテ糸保持具としての棒、すなわち先端棒やタテ巻き棒などのタテ糸保持棒をともなったタテ糸先端部の保持方式には、次のような4種類があり、それらの保持方式の違いには、タテ糸の整経方式も少なからず関係している。

①垂直に設置された先端棒（タテ糸保持棒）にタテ糸を直接固定する保持方式　この保持方式の先端棒としては、杭や柱、あるいは木の幹などが使われている。このばあいのタテ糸の先端部は束ねた状態で、直接、先端棒に結び付けて固定されている。このようなタテ糸先端部の保持方式をともなった腰機の整経方式としては、これまでに平整経式のみを確認している（図1）。また、そうした腰機のうちのひとつには、中国の雲南省に住む彝族の腰機（写真1）があり、1996年の現地調査のおりに、この腰機では木綿の無地織物が織られていた。

②垂直に設置されたタテ糸間接保持棒によってタテ糸を固定する保持方式　この保持方式では、タテ糸の先端部が先端棒（タテ糸保持棒）に束ねた状態で結び付けられているか、タテ糸の先端部が先端棒に織幅とほぼ同様の幅に並べた状態でかけわたされている。さらに先端棒は、それ自体に繋がれた紐を介して、垂直に設置された杭や柱、あるいは木の幹などのタテ糸間接保持棒によって固定されている（図2A～2B）。このようなタテ糸先端部の保持方式をともなった腰機の整経方式としては、これまでに図2Aに対応するものとしては平整経式が、また図2Bに対応するものとしては、平整経式と結節輪状整

写真2　ケチュア人の腰機による機織り
（ペルー、ピトゥマルカ：1999年）

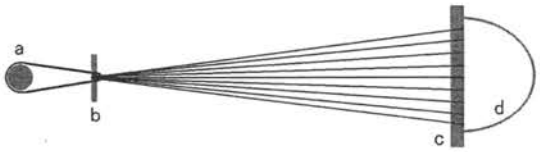


図2A　垂直に設置されたタテ糸間接保持棒によってタテ糸を固定する保持方式
a-タテ糸間接保持棒、b-先端棒、c-布巻き棒、d-腰当

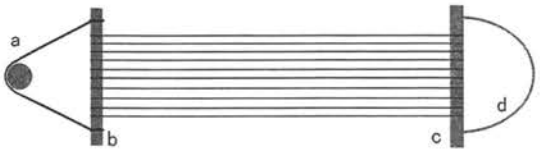
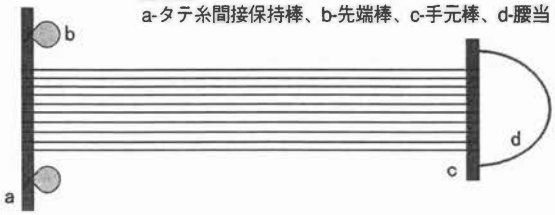


図2B　垂直に設置されたタテ糸間接保持棒によってタテ糸を固定する保持方式
a-タテ糸間接保持棒、b-先端棒、c-布巻き棒（整経方式が平整経式の場合）、あるいは手元棒（整経方式が結節輪状整経式の場合）、d-腰当

写真3　キアムンガン人の腰機による機織り（インド、ナガランド州：1996年）

図3　水平に設置された先端棒にタテ糸を直接固定する保持方式
a-タテ糸間接保持棒、b-先端棒、c-手元棒、d-腰当



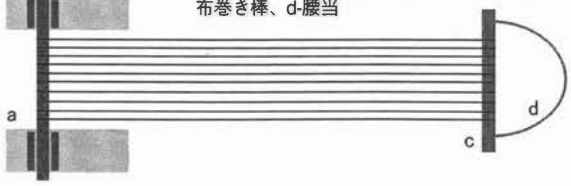
経式が知られている。それらのうちで図2Aの整経方式が平整経式の腰機としては、わが国のアイヌ人の腰機がある。また、図2Bで整経方式が平整経式の腰機のうちのひとつには、南米のペルー・アンデスに住むケチュア人の腰機（写真2）があり、1999年の現地調査のおりに、この腰機ではアルパカの毛を糸素材としたヨコ糸浮織技法による紋織物が織られていた。さらに図2Bで、整経方式が結節輪状整経式の腰機のうちのひとつには、インドネシアのスラウェシ島中部の山岳地域に住むママサ・トラジャ人の回転板綜絖をともなった腰機があり、この腰機ではタテ糸浮織技法による木綿の細幅織物が織られている。

③水平に設置された先端棒（タテ糸保持棒）にタテ糸を直接固定する保持方式　この保持方式では、タテ糸が織幅を超える長さの先端棒に織幅とほぼ同様の幅に並べた状態でかけわたされており、先端棒の両端は、杭、柱、木の幹などの垂直の棒、あるいは機台などのタテ糸間接保持具によって固定されている（図3）。このようなタテ糸先端部の保持方式をともなった腰機の整経方式については、これまでに輪状整経式と擬似輪状整経式を確認している。それらのうちで整経方式が輪状整経式の腰機のうちのひとつには、インドのナガランド州に住むキアムンガン人の腰機（写真3）があり、1996年の現地調査のおりに、この腰機では木綿とウールの糸を使ってヨコ糸浮織技法によるショール用の紋織物が織られていた。また、整経方式が擬似輪状整経式の腰機のうちのひとつには、インドネシアのスラウェシ島北部に住むゴロンタロ人の腰機（写真4）があり、1976年の現地調査のおりに、この腰機では筒型スカート用の木綿の格子縞の織物が織られていた。

写真4　ゴロンタロ人の腰機による機織り（インドネシア、スラウェシ島リムボト：1976年）

④水平に設置されたタテ巻き棒（タテ糸保持棒）にタテ糸を直接固定する保持方式　この保持方式では、タテ糸の先端部は織幅を超える長さのタテ巻き棒に、織幅とほぼ同様の幅に並べた状態で巻き取られており、タテ巻き棒の両端は機台（タテ糸間接保持具）によって固定されている（図4）。このようなタテ糸先端部の保持方式をともなった腰機の整経方式は平整経式のみと見られ、これまで他の整経方式については確認していない。また、そうした腰機のうちのひとつには、中国の広西壮族自治区に住む壮族の腰機があり、1996年の現地調査のおりに、この腰機では衣料その他の用途としてもちいられるヨコ糸浮織技法による絹の紋織物（壮錦）が織られていた（写真5）。

図4　水平に設置されたタテ巻き棒にタテ糸を直接固定する保持方式
a-タテ糸間接保持棒(機台)、b-タテ巻き棒、c-布巻き棒、d-腰当



環太平洋中心の腰機文化圏

腰と棒を使ってタテ糸に張力を付与する型式の腰機は、これまでに東アジア、東南アジア、南アジア、北東アジア、オセアニア、北米、中米、南米、ヨーロッパ、およびマダガスカルといった、きわめて広範な地域で使用されてきたことが知られている。ただし、それらのうちで、東アジア、東南アジア、南アジア、オセアニア、北米、中米、南米、マダガスカルにおいては、腰機が衣料素材をはじめとする汎用的な用途の織物を織るための織機として、普遍的にもちいられてきたのに対して、北東アジアとヨーロッパにおいては、細紐や細帯などといった細幅織物を織るための専用の特殊な織機としてもちいられてきたことが知られている。

そうしたことから、腰と棒を使ってタテ糸に張力を付与する型式の腰機を世界的な視野のなかで見わたしてみると、汎用的な用途の織物を織るための腰機、すなわち汎用腰機は、東アジア、東南アジア、南アジア、オセアニア、北米、中米、南米、マダガスカルといった、環太平洋とその周縁地域に分布していることがあきらかになっている。また、先月号で紹介した腰と足

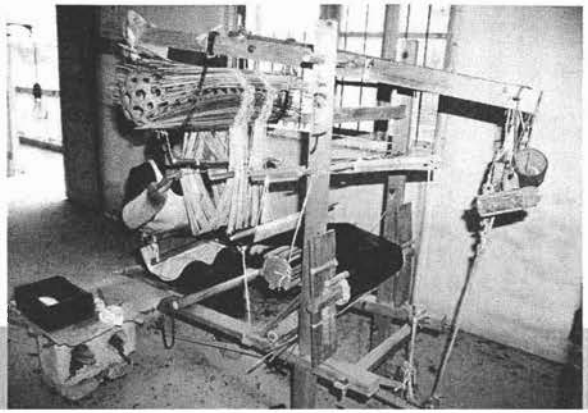


写真5　壮族の腰機による機織り（中国、広西壮族自治区、賓陽：1996年）

写真6　ザフィマニリ人の腰機による機織り
（マダガスカル、アントエトラ：1997年）

を使ってタテ糸に張力を付与する型式の腰機も東アジア、東南アジア、南アジア、ミクロネシア、および南米に分布している。したがって、環太平洋を中心とした地域は、世界的に腰機が集中的に分布している地域として位置づけられ、環太平洋とその周縁地域は、腰機を使って織物を織るという腰機文化圏としてとらえられる。

なお、読者の方々のうちには、こうした環太平洋を中心とした腰機の分布のうちに南アジアやマダガスカルがどうして含まれるのかと疑問に思われる向きがあると推察される。したがって、以下ではこの点について若干の補足的な説明をしておきたい。まず、南アジアで腰機を使用している地域は、ネパールやブータン、およびインド東北部のナガランド州、マニプール州、アッサム州などである。そして、この地域で腰機を使って機織りをおこなってきた民族は、民族分類の上で、中国や東南アジアの大陸部で腰機を使って機織りをおこなってきた多くの民族とともにシナ・チベット語族として位置づけられており、これらの民族の基層文化には、腰機を使って織物を織るという機織り技術をはじめとする数多くの文化的な共通性が見いだされる。一方、マダガスカルはアフリカの東海岸の沖に浮かぶ島であるが、この島に住む民族の多くは紀元後まもないころから14世紀ころまでのあいだに、インドネシアから波状的に渡来してきたオーストロネシア語族の末裔である。マダガスカルでは現在、ザフィマニリ人のもとにのみ腰機を使った機織り技術が継承されている（写真6）が、そうした腰機をともなった機織り技術は、オーストロネシア語族のインドネシアからの渡来とともにマダガスカルにもたらされたと考えられる。なお、オーストロネシア語族は台湾、東南アジアの島嶼部、ミクロネシア、ポリネシアなどの太平洋地域に住む諸民族のあいだに共通する系統の現地語を話す民族の総称であり、マダガスカルとインドネシアに住んでいる民族の多くは、ともにオーストロネシア語族の一派であるヘスペロネシア（インドネシア）語派に属している。

写真7　サーミ人の腰機による機織り
（ノルウェー、カウタケイノ：1995年）

北東アジアとヨーロッパの腰機

腰と棒を使ってタテ糸に張力を付与する型式の腰機は、すでに述べているように、北東アジアとヨーロッパでも使用されてきたが、それらの腰機はもっぱら細紐や細帯などの細幅織物を織るための細幅織物専用機として使われてきた。

それらのうちで、北東アジアで使われてきた腰機は、ロシアの沿海州に住むウリチ人のもとで真田紐と同様のタテ糸浮織技法によるタテ畝組織の細帯を織るために使用されてきた。この腰機のタテ糸先端部の保持方式は、前記②の垂直に設置されたタテ糸間接保持棒によってタテ糸を固定する方式であり、整経方式は輪状整経式である。一方、ヨーロッパの腰機については、これまでにノルウェー北部のサーミ人のもとで使用されてきたことがあきらかになっている。1995年に現地で調査した腰機は、開孔板綜絖をともなったもので、タテ糸浮織技法によって細紐が織られていた（写真7）。また、タテ糸先端部の保持方式は、前記①の垂直に設置されたタテ糸保持棒（先端棒）にタテ糸を直接固定する保持方式であり、整経方式は平整経式であった。なお、ヨーロッパではフランスにおいても腰機を使って細幅織物が織られていたとのことであるが、詳細については不明である。

（国立民族学博物館 民族文化研究部 教授／
よしもと・しのぶ）

文献

BOLLAND, R.
1972年　Three Looms for Tablet Weaving. *Tropical Man*, vol.Ⅲ（1970）, Leiden: E.J.Brill.

柳　元悦
2003年「ウリチの帯織り技術」、『北太平洋の先住民交易と工芸』、思文閣出版。

吉本　忍
1990年「インドネシアにおける手織機の類型論的研究」、『国立民族学博物館研究報告』15巻1号。
1995年「日本とその周辺地域における機織り文化の基層と展開」、『生活技術の人類学』、平凡社。